

保育教材としての「手遊び」に関する一考察

吉用 愛子・奥田 恵子¹⁾

A Study of “TEASOBI” Hand Games Children Play as Teaching Materials at Nursery School

Aiko Yoshimochi and Keiko Okuda

Abstract

The authors conducted a survey among preschool education students at a junior college regarding the subjects of hand games played by young children. The focus of the questionnaire for first year students was centered on their practical knowledge of the many kinds of hand games children play. For second year students, the focus centered on the number and variety of hand games the students observed during their practice teaching. They were also asked to describe the reaction of the children when they played hand games and how often they played them. In both questionnaires, school nurses were asked about their perspective on the manner and utilization of children's hand games that they could observe in their everyday contact with them.

The results of the survey clarified various actual conditions regarding the playing hand games among children. The first year students' survey was able to identify 54 different types of hand games that children learn while in kindergarten or nursery school. Among nursery school children, the kinds of hand games played could be categorized by age. Our results also demonstrated that hand games were an enjoyable part of the children's play at anytime and it effectively and positively changed the atmosphere of the children's learning environment. As an example, before starting such activities as storybook reading, watching a picture story show, or doing some type of activity, if the children played some hand games their ability to concentrate on the subsequent activity was significantly improved.

Received Oct. 31, 2007

1】はじめに

古来よりわが国には、「わらべうた」が伝誦されている。これらの歌詞・旋律に合わせて手やからだを動かすことは、子供たちの運動神経系の発達を促し、リズムカルなからだの動きと共に創造性を養い豊かな情緒を育むものといえよう。このような意味において、「手遊び」は保育現場において欠かすことのできない大切な教材の一つである。

1) 滋賀女子短期大学

殊に、乳幼児期の神経機能や感覚機能の発達は、それぞれの機能の効果が現れるレディネス、即ち生理学的な準備状態にある。このような状態にある幼児期にこそ適切な刺激を与え、そのインプットに対し自然に楽しく意識的な反応を効果的に高めるための教材は非常に大切である。そのような教材として「手遊び」は、指先で顔に触れ、からだに触れながらその部分の名称と共に自分のからだの部分を意識し、からだ全体でリズムをとったりしながらスマートな動作が養われていくものである。

人の成育の過程の中で音とのかかわりは避けることのできない必須要件である。なかでも保育の場では、音とリズムが豊かでおおらかな情緒を育み、また遊びを通して人と人とのかかわりも学ぶ大切な場である。そこで行われる「手遊び」は、大きな魚を見て手を広げ、魚の跳ねる様子を表現したり、テレビ漫画のメロディーに合わせからだを揺らし、例え人の真似であっても、感じたものを表現する楽しい遊びである。特に、幼稚園教諭・保育士養成課程では、実際の保育現場で必要とされる保育実践能力を育成することも大切な役割となっている。

このような保育者の資質向上の一環として、かつては子供達の遊びであった「手遊び」が、集団的に、あるいは個々の人間関係育成や情緒的安定などの面から寄与しているものと思われる。阿部は¹⁾「手遊びや指遊びは、劇遊び、オペレッタといった表現活動はもとより、ひいては人間関係もすべて、表現することの上に成り立っている」と述べている。また、子どもの人格形成にとって大切な要素である、協調性、創造力、言葉の発達などを促す力があるといわれている²⁾。

今日では、保育現場において「手遊び」の存在は欠かすことのできない教材の一つになっている。「手遊び」に関する出版物も多く、幼児教育の過程では授業科目の中で紹介されたり、幼稚園・保育園などへの実習生の心構えの一つとして習得しているのではなかろうか。

今回は、将来保育者を目指し幼児教育に取り組んでいる幼児教育学科の学生へのアンケート調査を通して、1年生の学生には幼児期に遊んだ記憶の中から保育教材としての「手遊び」を呼び起こし、再認識させ、2年生の学生には実習経験から「手遊び」の重要性を確認させるとともに、現在、幼稚園・保育園に勤務する保育現場での取り組みについて把握することを目的とした。

II】調査方法

調査対象は、G 大学短期大学部幼児教育学科学生1年生124名、2年生100名、およびS 短期大学幼児教育保育学科学生1年生166名、2年生133名、合計523名（1年生290名、2年生233名）である。また、幼稚園・保育園に勤務する幼稚園教諭および保育士190名である。

調査は、アンケート方式により、1年生の学生には、「手遊び」の経験、知っている種類、および遊びを誰から教わったか、また遊び相手や遊んだ場所など6項目について、また2年生の学生には教育・保育実習中の「手遊び」について、実施できた種類や子供の反応、およびどのような時に実施したか、など5項目である。

これらの学生が卒業し、保育現場勤務者となった190名に対し、郵送により「手遊び」に対する考え方、具体的な活用、子供の反応など8項目について実施した。回収率は35.7%（68名）であった。

以上の調査期間は、在学生に対しては平成17年6月～10月、および保育現場勤務者となった同一被験者に対しては平成18年6月～8月にそれぞれ実施した。

Ⅲ】結果と考察

「手遊び」を知っているがどうかについての質問に対し、1年生の学生290名中、4名のみが知らないと回答していた。またこれまでに遊んだことがあり、覚えている「手遊び」は全体で54種類にものぼった。特に全回答数（重複回答あり）の中で“グーチョキパーでなにつくろう”については18%（123名）が経験しており、また“きりんさん”については15.8%（107名）、“大きな栗の木の下で”については11.2%（76名）が、“むすんでひらいて”は10.3%（70名）が知っていると回答している。その他、「小さな庭・3匹のこぶた・パンやさん・ピクニック・コロコロたまご・魚がはねてピョン・あたまかたひざポン」などの名前が取り上げられていた。その主なものを図1に示した。

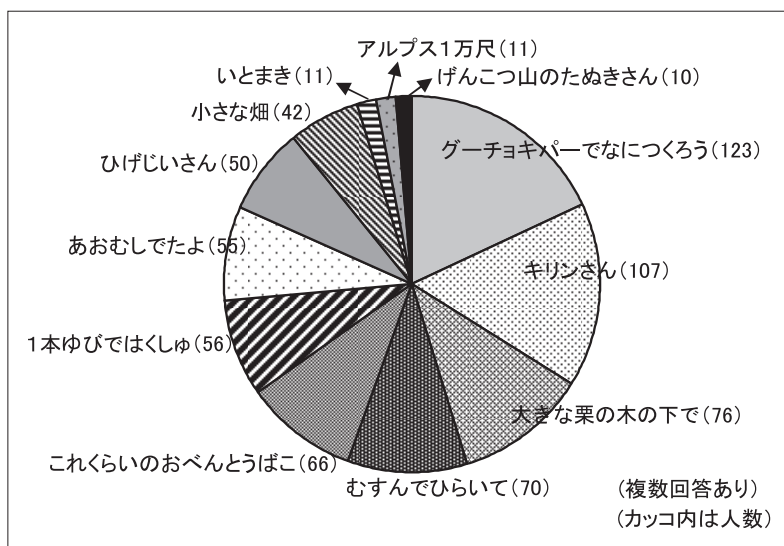


図1 1年生の学生が知っていた「手遊び」

1年生の学生は、「手遊び」について保育教材としての認識はあまりなかったようで、昔ながらの簡単な“グーチョキパーでなにつくろう”や“むすんでひらいて”などをよく知っている様子であった。

「手遊び」を誰に教えてもらったかという問に対し、やはりそれぞれの幼児期に“幼稚園・保育園の先生”からが一番多く264名であった。

この問いに対する全回答数（重複回答あり）の約45%は幼稚園・保育園の先生から教わっている。従って、保育者の存在意義は大きく、そのためにも保育者養成校では重要な教材の一つとして指導することが大切であろう。次いで“母親”から99名、また子ども時代に“友達”から73名、中には大学に入り幼児教育を専攻するようになって、授業の中で“大学の先生”から60名が教わったと回答している。（図2）。

保育教材として、授業で指導を受けるだけではなく、広く保育現場や先輩の活躍する姿をみる機会を積極的にとらえることにより、新しいレパートリーを吸収、習得することができるであろう。

図3には、誰と一緒に「手遊び」をした経験があるかを訊ねたところ、やはり幼稚園・保育園の“友達”が一番多く260名あった。次いで“母親”が125名、“幼稚園・保育園の先生”が123名であった。兄弟姉妹や祖父母などの遊びが比較的少なく、現代の家族構成を象徴しているように思われる。

遊んだ場所としては、“幼稚園・保育園”が多く、全回答数（重複回答あり）の52.9%（226名）であった。次いで“家”が32.5%（139名）となっていた（図4）。

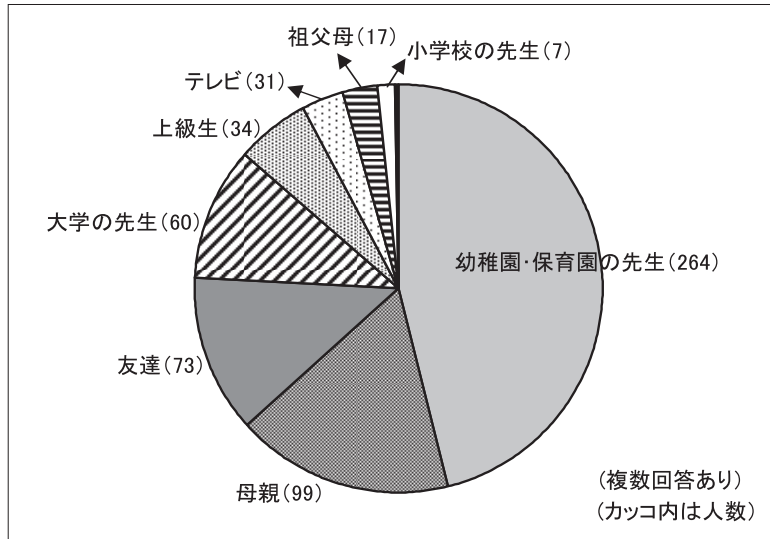


図2 「手遊び」を教えてもらった人

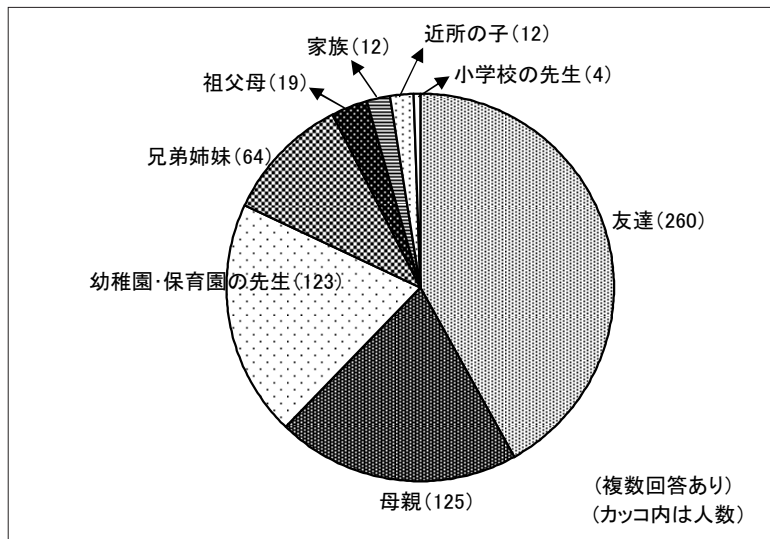


図3 一緒に遊んだ事のある人

今日の子どもたちの遊びは、友達だけではなく遊ぶ場所までも多くの制約を受け、友達を訪ね町内や近隣へ遊びに出かけることもなく、また年長児、年少児の区別なく一緒に遊ぶ機会も失われているのが現実である。このような時代的な要請から幼児教育関連の施設の存在意義は大であるといえよう。

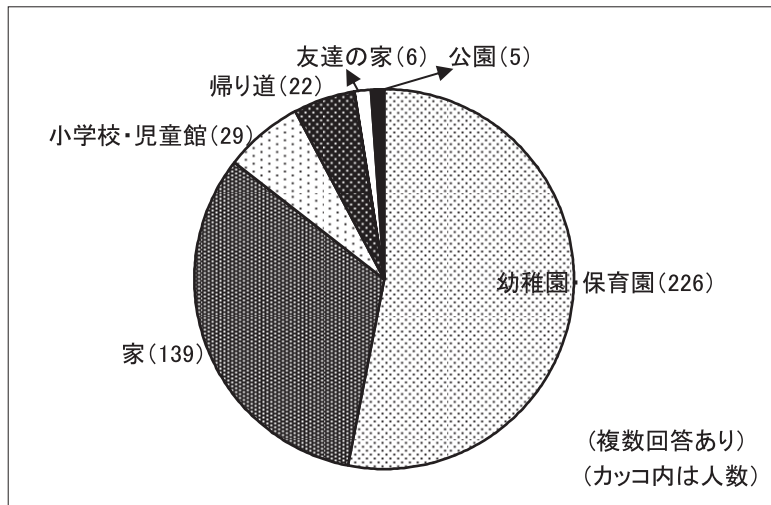


図4 子供のときによく遊んだ場所

「手遊び」について1年生の学生は、①楽しい遊びであり、②簡単にできる。しかも、③道具が無くてどこでも遊べ、④繰り返しがあるので幼児にも覚えやすい、ことなどが述べられている。また、学生自身が面白いのでたくさん覚え、実習で役立てたい。そして子供の脳の発達によさそうに思うとも述べ、さらに誰とでも遊べることから子供たちにとって良い友情の輪が広がっていくように思われ、保育には欠かせない遊びである。等々の感想を述べている。

授業やその他の保育現場や先輩の姿を見ながら、機会を捉えて新しい遊びを一つでも多く吸収し、会得していくものと思われる。

実習を終わった2年生の学生に対して行った調査で、実習を経験して、「手遊び」のレパートリーが増えたと回答した学生は、233名中87.5% (204名)あり、増えなかったと回答した学生は12.4% (29名)であった。増えなかったと回答した学生は、既にかかなりのレパートリーを持っており、特に新しく覚えた種類が無かったようである。

図5に示すように、全回答数(重複回答あり)の33.5% (138名)は“実習先で習った”と回答しており、実習を経験することによりそのレパートリーが増えたことが実証できる。次いで“友人に教わった”者が24.5% (101名)、大学での“授業”で習った者22.8% (94名)であった。実習を経験することの重要性と共に、在学中に授業や友人関係を通して習得する機会が多くあることが期待される。

実習先で、どんな時に「手遊び」をしたかという問に対し、“絵本を読む前や紙芝居の前”に実施すると全回答数(重複回答あり)の50.1% (149名)であった。また、“子どもを集中させる時”17.8% (53名)、“降園準備の時”17.5% (52名)という回答があり、絵本を読む前や紙芝居を見る

前、或いは大切なお話や活動をする前に、子どもの注意力を集め、集中させるための導入として用いられているといえよう（図6）。

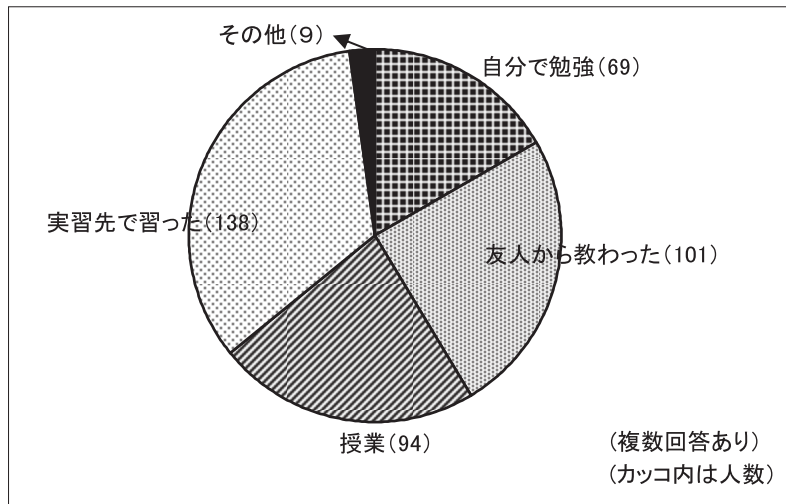


図5 手遊びをどのようにして学んだか

実習において2年生の学生たちが保育現場で子供たちと遊んだ経験から、子供たちの好きな「手遊び」としてあげた主な12種類を次の表1に示した。実習で子どもたちと一緒に楽しく遊んだ「手遊び」は本来の種類だけではなく、替え歌を用いた「手遊び」も多く見られる。このように保育の現場では様々な機会を捉え、年間を通していつも用いられている教材である。そのために子どもの好きなキャラクターを取り入れ、次々と新しい「手遊び」が工夫されている。

この他、グーチョキパーでなにつくろう、3匹のこぶた、パン屋さんなどがあげられていた。

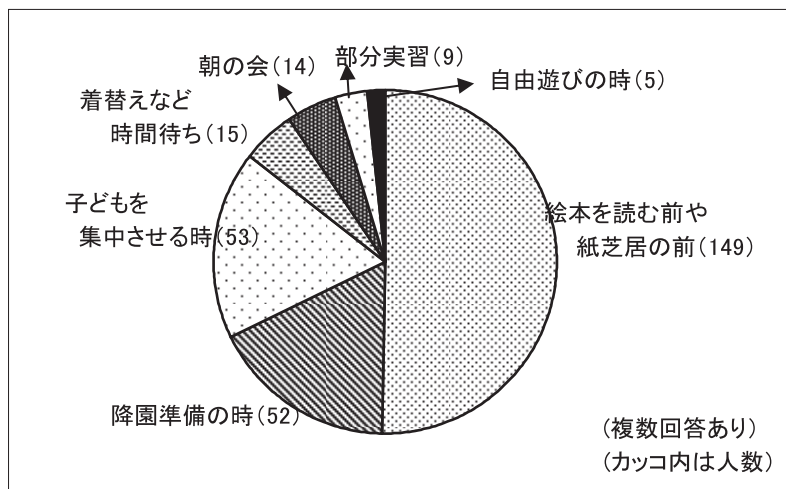


図6 「手遊び」をする時

幼児期の歌遊びやリズム運動などは身体的・精神的に与える影響力は計り知れないものがある。一般的に、顔遊び・からだあそび・手遊びなど、指で顔のいろいろな表情をつくったり、電車やバスなどの乗り物、或いは猫や犬などの動物などいろいろな人や物の動きを、リズムカルに模倣する遊びである。多くは、「からだあそび」、「顔あそび」、「手あそび・指あそび」、「身ぶりあそび」、「手合わせあそび」、「足あそび」などに分類され紹介されている^{2) 3)}。

表1 子供たちが好きな手遊び

遊びの名前	人数
トントントントンアンパンマン	75
あおむしでたよ	62
ひげじいさん	48
一丁目のピッチュー	36
パン屋に5つのメロンパン	32
1本ゆびではくしゅ	21
きりんさん	18
こっちからピカチューできたよ	18
一匹のかえる	16
アンパンマンがお出かけするときは	11
トントントントンドラエモン	10
かなづちトントン	10

現在、幼稚園・保育園に勤務する68名の保育者に対し、「手遊び」について現場ではどのように捉え、どのような考え方で扱われているのかについて、質問した結果、図7に示すように“子どもたちが楽しめる”遊びであるとの回答が一番多く、次いで “子どもをひきつけ集中させる”、“活動前の導入に必要”との回答があった。これは、子どもたちを次の話題や活動に注目させ、注意を集中させる手段として大切な導入の方法であると考えられる。

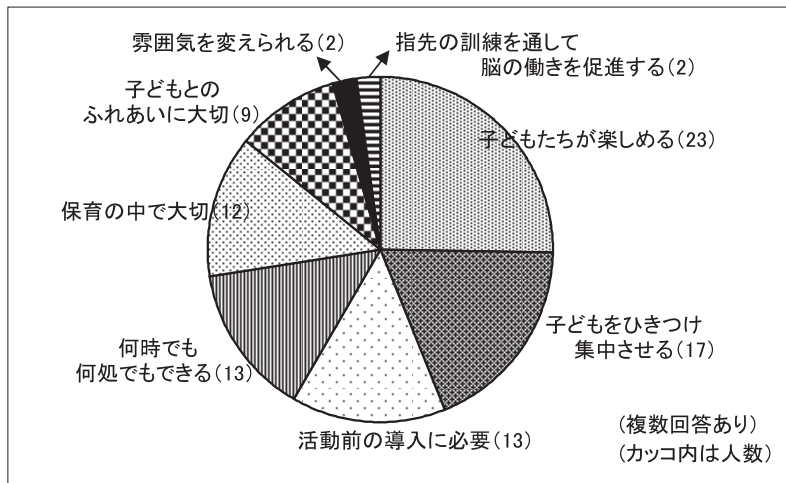


図7 保育現場での「手遊び」について

大勢の子どもが、何の束縛もなく友達との遊びや、その他の楽しい事へ注意力が散漫な状態になっているとき、これを一つに纏めることは大変困難なことと思われる。このような状態にあるときの子どもの気持ちを引き付けることのできる有効な手段として活用されている。

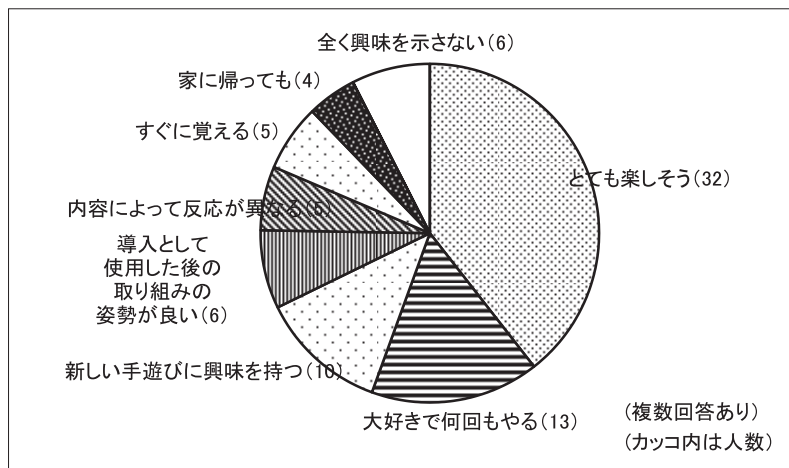


図8 「手遊び」に対する子どもの反応

このように子どもたちが集中できる「手遊び」について、“いつもとても楽しそうにやっている”との回答が一番多く、しかも好きな種類の「手遊び」は“大好きで何回もやる”となっている。

また子どもたちは“新しい種類に興味が強”いようであるが、やはり遊びの内容によっては好き嫌いが生じている。しかし、前述のように導入に必要であると同時に、これを導入にした時、例えば何かの活動を始める前に「手遊び」をしたのと、しなかったのとでは、次の活動での取り組みの姿勢が全く異なってくるようである。

しかしながら、殆ど全ての子どもが楽しく、一生懸命に取り組んでいると思われる「手遊び」に全く興味を示さないという回答が、6名の現場の先生から寄せられている。子どもとして何かほかに気をとられ、注意がそれているのかとも思われるが、ここで見られる回答はいつも気になる存在として取り上げられており、心理的・情緒的な問題の存在も考えられる。

年齢別に見た子どもが大好きな「手遊び」は、第1位は、“アンパンマンがお出かけするときは”であった。これは1歳児から5歳児まで、万遍なく取り入れられている遊びであった。次いで“3匹のこぶた”、“ゲーチャキパーでなにつくろう”、“1丁目のウルトラマン”、“あおむしでたよ”なども1歳児から5歳児まで幅広く取り入れられているが、特に3～4歳児に人気のある種類である。しかし、“1丁目のピカチュウ”は、1～2歳児には難しい種類のように、殆どの保育園では取り上げられていなかった。逆に、“ひげじいさん”や“トントントントンアンパンマン”は1歳児の遊びに多く取り入れられている(図9)。

この他、1歳児には「うさぎがはねてピョン、いたずらねこちゃん、くいしんぼうゴリラ、あたまかたひざポン」などが、2歳児には「いっぴきのカエル、手をたたきましよう、ミッキーマウスマーチ、1本ばし1本ばし」などが取り上げられている。3～5歳児は「メロンパン、にんじゃ、ポテトチップス、まるいたまご、うちゅうじん、バスにのって、コロコロたまご」など中

心に、全部で35種類の「手遊び」が取り上げられている。

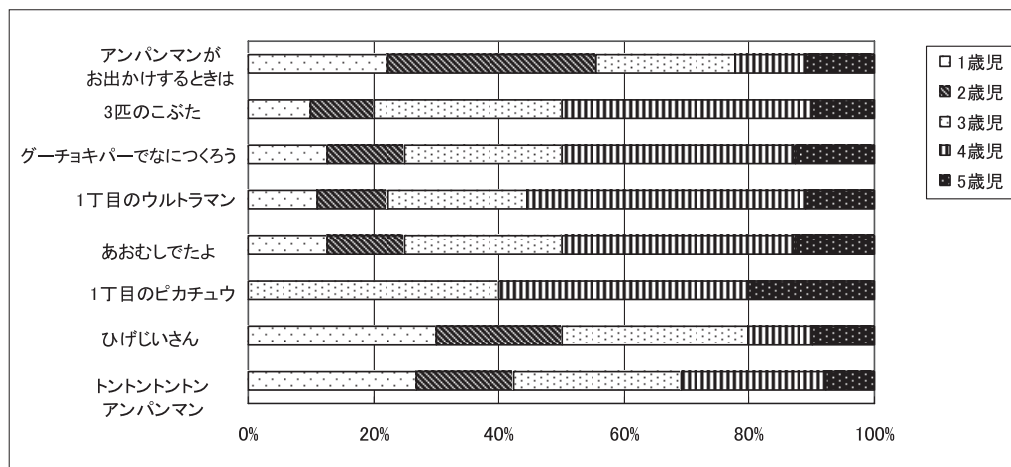


図9 年齢別に見た子どもたちが大好きな「手遊び」

現場では、新しい「手遊び」をどのように習得していますかという問いに対し、職場の同僚からという回答が、全回答者68名中の46% (31名) あった。次いで保育雑誌からと回答した人は24.2% (16名)、研修会で習得したと回答した人は17.9% (12名) であった。その他は友人から、或いはインターネットを利用して習得したという回答であった。

子どもの楽しい遊びとしてだけでなく、導入として担当するクラスの子どもの一つに集中させ、注意を向けさせることのできる「手遊び」については、できる限り幅広いレパートリーを持ち、子どもの年齢に合った「手遊び」の種類を覚えておくと良い。そしていつでも自信を持ってできるようにしておくこと。更に、同じ種類でも自分なりにアレンジメントして、遊ぶことができると良い。そして、最後には、覚えた種類はきちんと書きとめておくことなどが、現場の先生たちから、保育者養成校の学生へのメッセージとして寄せられた。

IV】まとめ

保育教材としての「手遊び」について、幼児教育学科に在籍する学生に対し、アンケート調査により、1年生の学生には「手遊び」の経験、知っている種類、誰から教わったかについて、また教育・保育実習を経験した2年生の学生には、実習中に実施できた「手遊び」の種類と子どもの反応、おおよどのような時に実施したかなどについて質問した。

保育現場に勤務する先生たちには、手遊びに対する考え方や、具体的な活用法について調査を行った。

これらの結果、幼稚園・保育園に在園中に既に54種類以上の「手遊び」で遊んでおり、やはり友達と遊んだ経験が一番多かった。保育現場においては子どもの年齢に応じた種類の「手遊び」が用いられており、最も子どもたちが楽しんで遊び、いつでも、どこでも実施することのできる大切なあそびであるといえる。そして子どもを引き付けることができ、その場の雰囲気を変える

のに役立っている。具体的には“絵本を読む前”、“紙芝居を始める前”、“何か活動を始める前”などに子どもの気持ちを集中させる一つの導入過程として利用されていた。

本稿は平成19年度、日本保育学会第60回大会で発表したものである。

参考文献

- 1) 阿部直美、「だーいすき手あそび106」1998年第4版、株式会社メイト。
- 2) 佐藤美代子、岩堀瑞子、「目あそび・手あそび・足あそび」2007年第7版、株式会社 草土文化。
- 3) 尾原昭夫編著「手あそび指あそび106」1991年、保育資料社。

手遊びについて	
1部1年()番 氏名()	
1. 「手遊び」をしていますか。	
はい	いいえ
2. 現在覚えている手遊びを書いてください。	
曲 名	歌 詞
() ()	()
() ()	()
() ()	()
3. 手遊びは誰に教えてもらいましたか。	
() () () () () ()	
4. 手遊びは誰と遊びましたか。	
() () () () () ()	
5. 手遊びはどこで遊びましたか。	
() () () () () ()	
6. 手遊びについて思っていることを書いてください。	

手遊びについて II

1部2年()番 氏名()

1. 実習を経験し、手遊びのレパートリーは増えましたか。
はい いいえ
2. 『はい』と答えた方へ…どのようにして増えましたか。
イ. 自分で勉強した ロ. 友人に教えてもらった ハ. 授業で習った
ニ. 実習先で習った ホ. その他()
3. 実習では一日の保育の中でどのような時に手遊びで遊びましたか。
4. 子ども達の手遊びに対する反応はいかがですか。
5. 子ども達が大好きな手遊びを教えてください。
曲名 歌 詞
() () ()
() () ()
() () ()
() () ()
() () ()

アンケート

1. お勤め先はどちらですか。
・幼稚園 ・保育園(所)
2. 今年度は何歳児を担当されていますか。
・5歳児 ・4歳児 ・3歳児 ・2歳児 ・0、1歳児
3. 『手あそび』についてどのような考えをおもちですか。
4. 毎日の保育の中で、『手あそび』をどのように活用されているか具体的にお書きください。
5. 『手あそび』に対する子ども達の反応はいかがですか。
6. 子ども達が大好きな『手あそび』を教えてください。
(
(
7. 新しい『手あそび』はどのようにして入手されますか。
8. 大学時代に『手あそび』についてやっておいた方がいいと思うことがあれば教えてください。

ご協力ありがとうございました。